

Historio  
de  
La Kontraŭregima Esperanto-Movado

verkis

OOSIMA Y. kaj MIYAMOTO M.

1974

SANSEIDO-TOKIO

まえがき

一九六七年十一月十一日の夕方、街路樹の落葉が舗道に舞う東京麴町の首相官邸のそばで、佐藤首相がアメリカのベトナム侵略に軍事協力するため渡米するのに抗議して、一人の老人が焼身自殺をはかった。老人はすぐ近くの病院に運ばれ数時間のちに死んだが、首相はそれにかまわず翌日、羽田空港での学生たちの抗議行動のなかをアメリカへ飛んだ。

日本国内に、アメリカによるベトナム侵略への反対運動が高まっていたさなかに起こったこの事件のニュースは人々をおどろかせた。そのうえ、その老人、由比忠之進が古くからの熱心なエスペ란チストであり、エスペラント運動の持つ平和主義的傾向の信奉者であることが、この事実を知った人々を一段とおどろかせた。そして人々は国際友好のための言語運動のもつ反体制的な意義について改めて知らされたのであった。

エスペラントは一八八七年、帝政ロシアの支配のもとにあったポーランドにおいて、医師ザメンホフによって発表された。ロシアの激しい迫害のなかに生きたユダヤ人ザメンホフは、民族相争う矛盾に触発されて、民族はそれぞれ自己の言語を尊重しその発展に努めるとともに、すべての民族に共通な第二の言語——国際語を採用することによって、民族間の差別をなくし、民主的な国際的言語生活

をきずくべきだとしてエスペラント運動を創めた。そしてこの言語文化運動は二つの世界大戦の試練にたえて現在その発展をつづけている。

しかし、言語は個人の力によって発展するものであると同時に、それは社会的な現象であり、社会発展の流れに従って発展していく。したがって、社会のさまざまな矛盾を解決しようとする人びとの努力は国際的言語生活における矛盾を解決しようとするエスペラントと深いつながりを持たないわけにはいかない。反体制の立場に立つエスペランチストが政治的な反体制の運動にくみし、反体制の人びとがエスペラントを支持することとなるわけである。

このようにして、社会運動・エスペラント運動の歴史のうえで、多かれ少なかれさまざまな役割を果たした人たちの数は少なくない。しかし、それらの人たちが残した業績はこれまで顧みられることが少なかった。この本は、それらの人たちの足跡を社会運動・エスペラント運動の歴史のうえにたどり、かれらの果たした役割を明らかにし、なにほどこかの知識と教訓とを人びとに与えることを目的として書かれたものである。その大半は宮本が書き、プロレタリア・エスペラント運動についての部分は大島が書いた。なお、補足・訂正すべき点を指示していただければ幸いである。

一九七四年六月

著者

## 目次

第一章 世界を結ぶ一つの言葉	1
人類の未来を信じて	3
黎明期の学習者・運動者たち	6
エスペランチストの思想的分類	9
堺利彦の先駆的文章	11
第二章 大杉栄をめぐる人びと	17
一犯一語主義——エスペラント学校を開く	19
「主義者」の時代	22
在日中国人にエスペラントを教える	23
福田国太郎のこと	24
相坂侘のこと	27
アナキストたち——山鹿泰治らのこと	30
第三章 北一輝と出口王仁三郎	45
二・二六事件将校の手記から	47

北一輝の誤れる国際語論

北とエスペラント——ひとつの推定

大本教とエスペラント——源流は北一輝か

大本教のエスペラント運動

左へ右へ——大本教の平和運動

体制的な、あまりにも体制的な……

#### 第四章 緑化か赤化か

「第一次」共産党の人びと——片山潜ほか

水平社のエスペランティストたち

山川均とその周辺

クララ会と佐々城松栄

つぼみ落つ——山口小静

#### 第五章 神を殺す人びと

大正デモクラシーのころ——新人会の人びと

盲目の詩人エロシエンコに魅せられて

暗黒から光明へ——秋田雨雀

『種蒔く人』の活動家——佐々木孝丸  
「学連」の闘士たち——伊東三郎・武藤丸楠  
獄中のエスペランティストたち

#### 第六章 希望と嵐の時代——プロレタリア・エ

##### スペラント運動の足跡

「十月の嵐」にゆざぶらわれて

柏木ロンド——プロ科の成立へ

プロ・エス運動の旗上げ——ポエウの創立

ポエウ、多彩な活動を展開

統一文化戦線の一翼として——カップへの加盟

弾圧の下でのポエウ第二回大会

イーベ創立大会への密航事件

ポエウ潰滅への道

獄中から立候補、当選——小岩井浄のこと

教育活動家たち

#### 第七章 人民戦線を指向して

弾圧に抗して——当時の共産党	199
『マルシュ』の発足——運動の地方分散	202
『国際語研究』と『エスペラント文学』	215
死を賭した人びと——斉藤秀一らのこと	218
ディミトロフ報告のエピソード	221
中国人留學生のこと——運動の終焉へ	223
根こそぎの迫害——ソ同盟とドイツで	226
解放の担い手、中国のエスペラント運動	233
<b>第八章 自由主義者も相ついで</b>	237
ピンクも白もねらわれて……	239
大空詩人の過去——永井叔のこと	243
兵役拒否→転向——インガ・オサムのこと	245
<b>第九章 戦う中国で——長谷川テルの生涯</b>	255
奈良女高師文化サークルで	257
東京で活動——中国人と結婚	263
日本脱出——嵐の中国へ	270

抗日の怪放送	276
冬来たりなば——重慶で	285
北の空に消えた星	292
<b>第十章 雲と火の柱——戦後の運動</b>	297
敗戦——運動の再出発	299
原爆反対のために	307
『世界の子ども』を編さん	316
もっとも政治的な死——由比忠之進の焼身自殺	318
中国の運動と手を結んで……	328
今後の課題——アジア・アフリカへの視点	332
参考文献	335
エスペラント運動史 小年表	336
あとがき	353
カバール絵 安田勝彦『世界エスペラント大会』（一九六五年）	
表紙 スペイン共和国（人民戦線政府）発行のエスペラントのシール	